
英雄の花嫁

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の花嫁

【Nコード】

N1724BA

【作者名】

佐倉風弦

【あらすじ】

貴族の令嬢と軍人の恋物語。
全二話。

上

《レンディタウン》という町が存在した。

セルファ王国の中心部に位置する首都である。

日中は、観光客や仕事で駆け回る人々、はたまた遊びまわる者達で基本的にどの通りに出ても人の姿が絶えなかった。

溶けそうなほど青い空からは明るい太陽の日差しが降り注ぎ、町を照らしていた。

一見して平和そうな国だが、そうではなかった。

隣国との関係が悪化し、戦争まで発展しているのが現状だ。

現在は境界線での戦乱が主で、町まで危害は及んでいない。

この先、どうなるかは不明だが基本的にこの国の人間は楽観的な者が多く、いつも通り明るい雰囲気ばかりが溢れていた。

《デルー通り》の小さなカフェは、飲み物やケーキなどはもちろん、昼食を食べることもでき昼間は大勢の人でごった返したかった。

カウンター近くで店のなかの様子を見回していた立派な髭を生やし、高価そうなウェ이터用の服を着た男がいた。このカフェを営するワシルド・ウェイデンである。ワシルドは、自分の店で笑い合う客の様子を眺めたり、常連客と世間話で盛り上がるのが日常であつた。

自分がこの店を営んでいるというのが誇らしかった。評判も上々で、売り上げもかなりのものだ。

気分良く店内を眺めていたワシルドの元の一人の店員が駆け寄って来た。

「マスター、お客さんです」

「客？」

「はい、裏口の方から」

「なるほど、またあの子か」

ワシルドは裏口から、という言葉だけで客が誰なのか容易に分かった。

苦笑いを浮かべ、裏口へと向う。

店の奥の狭苦しいスペースにドアがある。

そのドアは開いており、一人の少女が立っていた。

年齢は十五、十六に見え、肩まで伸ばした黄金色の髪は王族や貴族を連想させ、人目を引くがその服装は田舎の牧場か農場あたりで働く少年風の白いシャツと膝あたりまである黒いズボン。頭には黒っぽい赤色の帽子を被っていた。可愛らしい顔立ちをしていたがその服装の

せいか取り立てて目立つわけでもない。

「こ、こんにちは」

「また抜け出して来たのかご令嬢」

この少女は、有名な資産家であるグラレゴ・テファニー伯爵の一人娘、セルア・テファニー。

セルアはどういうわけか、屋敷に一日中いるのが耐えられないようにで使用人の目を盗んで町を出歩く。当然、令嬢がいなくなったとなれ

ば使用人が探しに出てくるわけでこのような格好をして少しでも変装しているつもりだ。

遠目で見ると分からないだろう。

セルアがこのカフェに来るのは決まって、使用人の姿を近くで見かけて見つかる危険性がある時だ。

「とりあえず、しばらく匿ってもらえますか」

「はいはい。じゃあ、そのテーブルにでも」
「分かりました。あ、りんごジュースをお願いします」

セルアはテーブル前の椅子に腰掛ける。
ワシルドが持っていたりんごジュースを飲み干す。

「それにしても、令嬢が屋敷を抜け出すなんて関心しないぞ？ この町は大きいだけあっていろんな人種がいる」

「大丈夫ですよ。どうせ、いざこざに巻き込まれるのは美人ばかりですから」

「そうとも限らないぞ？ 何もこの町に存在する犯罪ってのは殺人や強盗なんかもある。おっさんでも巻き込まれる」

「犯罪に巻き込まれる可能性なんて、限りなく少ないですよ」

そう言ってセルアはりんごジュースを飲み干し、コップを置くと立ち上がった。

「もう行くのかい？」

「はい、もう行きます。今日は大人しく帰ります」

「珍しいな。今の話で恐くなったか？」

「違いますよ。友達が家に来るんです。すっかり忘れてました」

つまりその友人はセルアの自宅で待ちぼうけを喰らっているわけである。

友人が来るのを忘れるなどという失態を犯す者が他にどれだけいるだろうか。

セルアは、さっさとドアを開けると路地に出た。

入り組んだ路地は薄暗く、ゴミが散乱しているという状態で、湿った空気が漂っている。

これを気を悪くする者もいるんだろうが、いつも人目を避けるた

めにこういう道を通るセルアにとっては何も問題はなかった。
早足に歩いていると、目の前に一人の黒づくめの男が現れる。
セルアは怪訝そうな顔でその男を見上げた。

「お嬢さん、どうだ？ いい話があるんだが」
「わ、私は今話している暇はないんです」

そう言つて、反対方向へ向つて歩き出そうと思つたがそちらにも男がいた。

逃げ道がない。

しかも人気のないこの道では通行人も目撃者もない。

「……セルア・テファニーだろう？」

「人違いじゃないですか？」

とにかく落ち着き払つた口調で答えた。
相手の目的は何となく予想がついた。相手はこちらを名指ししているのだ。

大方、誘拐されて身代金を要求するのだろう。

「顔は知ってるんだ。とぼけても無駄だ」

「そ、その……これから約束があつて——」

「じゃあ行つていいですよ、と言つと思つか」

答えはノーである。

誘拐犯がわざわざ都合に合わせてくれるなんてことはあり得ない。

どうしても誘拐されるのは避けたかった。金が払われれば解放されるだろうが、それまでに何をされるか分からない。

おろおろし始めた時、声が響いた。

「遅くなってごめん。待ったかな？」

そんな言葉を発し、一人の青年が間に割って入って来た。

この国の人間にしては珍しい黒髪で青空を閉じ込めたような瞳で整った顔立ちの好青年である。黒い軍服と、軍人用の帽子を被っていることから軍人であることが分かる。

「おい、お前、痛い目みたくなかったら――」

黒ずくめの男が青年の襟首を掴むが、彼はすぐにそれを振り払い懐から拳銃を取り出し、男に向ける。

この青年がいかにも軍人の格好であることから本物と見て間違いないだろう。

「俺の連れに何か用かな？」

男達は黙ってその場を早足で立ち去った。

青年はセルアの方へ向き直り、明るい笑顔を浮かべる。

セルアは顔が熱くなり、息が苦しくなってきた。

「大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です」

答えた後はしばらくぼーっとしていた。

はっとして首を左右に振る。

私は何を考えてるんでしょうか？　いくら助けてもらったとは言え、初対面の相手に一目惚れしそうになるなんて……。

「令嬢が一人で出歩くのは関心しないな。次からは使用人の一人で

も連れて来たらどうだろう」

「そ、そうですね」

ぎこちない返事しかできなかった。

もう頭が真っ白で思考が追いつかない。

「じゃ、気をつけるんだよ——あ」

青年は立ち去ろうとして、足を止めて再度セルアに向き直った。

「一応送るよ」

「ひ、一人で大丈夫です……」

「念のためだ。また何かあったら困るだろう？」

「お願いします……」

セルアはこくりと頷き、青年の後に続く。

会話もないまま路地を歩き続け、おろおろした。何か話さなければと考えている内に青年の名をまだ聞いていないことに気づいた。

おどおどしながら話しかける。

「な、名前は何て言うんですか？ 私はセルア・テファニーです」

「俺はラシーグ。ラシーグ・アルファ。見て分かるだろうけど、軍人だぞ？」

「分かります。軍人の格好した一般人なんていませんし、もしいたら軍人になれないマニアなんでしょう」

セルアは、会話を少しでも弾ませようと冗談交じりに言った。

ラシーグは、無邪気な笑顔を浮かべたまま口を開く。

「そうだろうなあ」

そんな会話のなか、セルアは服装を改めなくなった。
農場で働いているような格好で引き立つものは何もない。

「な、何かお礼をしたいんですが」

セルアがそんなことを口走るとラシーグは、しばらくキョトンとした様子で彼女を見つめ、やがて明るい笑顔を浮かべる。

「じゃあ、五日後に食事をしようか」

「わ、分かりました。私のおごりですよ？」

自分がお礼をするんだから、それが当たり前だろうがセルアは一応尋ねてみた。

「ああ、いや、俺のおごりでいい」

「え？ でも、それじゃお礼にならないです」

「大丈夫大丈夫。一緒に食事してくれるだけで十分だから」

ラシーグはセルアを屋敷まで送り届けると、満面の笑みを浮かべた。

太陽のように明るい笑顔で、彼をますます引き立てる。

果たしてこの青年に想いを寄せる女が何人いることだろう。

考えるとセルアは不安になった。しかし、すぐにハツとする。

何を考えてんですか、私は！ 相手は初対面です。どういう者はよく知らないって言うのに……。

「じゃあ、当日迎えに来るからきれいな服でも揃えときなよ？」
「う……努力します」

立ち去って行くラシーグの後ろ姿を見つめていたセルアの心臓は今までにないほど高鳴っていた。

セルアはラシーグと約束した日までに何度か町に出かけたが、他の女と歩くラシーグの姿を二、三度見かけてがっかりした。いずれも違う女を連れていた。

太陽のような笑顔を振りまいて相手と盛り上がっているのを見ると気分が沈んだ。

……きつと、アイツは遊び人なんです。だから、気をつけないと。そうは思っても、ドキドキする気持ちは抑えられなかった。

その日、セルアは朝からそわそわしていた。

五時頃になり、外が薄暗くなり始めると彼女はいつそう落ち着きをなくしてしまう。

おろおろ部屋のなかを歩き回り、窓から外を見たり鏡の前に立って自分の姿を確認しては別の服に着替える。

身だしなみを整えていた時、はっとした。

な、何を緊張してるんですか私は！ デートに行くんじゃないんですよ。晩御飯を食べに行くだけなんですから、気合いを入れる必要なんかないじゃないですか。

そう思い、おろおろするのもやめ、着替えるのもやめた。結局一番着慣れた、ちょっと独特な青いワンピースだった。

対して飾り気はないが多少の可愛らしさはある。別に貴族のパーティへ行くわけではないのだから問題ないだろう。

ノック音が響き、メイドの声が聞こえる。

「セルア様、お客様ですが……」
「あ、今行きます！」

セルアは慌てて散らかった服を洋服だんすに詰め込むと、大きく深呼吸をして部屋を出た。

長い廊下を歩いて玄關まで行くと、やはり軍服に帽子といったスタイルのラグーシが笑顔で手を振っていた。

あの人は年中、軍服で生活してるんでしょうか？
そんなことを考えながら彼の前まで来た。

「ああ、良かった。実を言うとメイドさんに追い出されそうだったんだ」

苦笑いを浮かべながら肩を竦めた。

何となく分かった。

今まで客人として訪れたこともない見覚えのない男がいきなり令嬢を訪ねてきたとなればメイドが怪訝に思うのも当然である。

要するに不審者だと思われたということである。

しかし、そんな話はあまり気にならなかった。

セルアの心臓は激しく鼓動し、今にも張り裂けてしまうのではな
いかと思うほどだった。顔も熱くなってきたとにかくまずいと思っ
た。

そんなセルアの様子を分かっているのかいないのか、ラシーグは
につこりと笑いかけ、手を差し出した。

「じゃ、行こうか？」

「手なんか繋がなくても歩けます」

「つれないなあ。まあ、いいや」

むすっとした表情のまま、あまり喋れずにいるセルアに対してラ

グーシは明るい笑顔を振りまきながら生き生きとした様子で町の話をしてたり軍についての話をセルアに聞かせ、不安を持っていたセルアの心を明るくしてくれたような気がした。

しかし、問題はレストランについてから起きた。

下

仕事帰りの労働者や家族連れ、恋人達で賑わうレストランは少し豪華な装飾で煌びやかだった。

レストランに入った時、ラグーシの知り合いらしい女性が彼に声をかけた。

彼はそれに答え、相変わらずの笑顔でしばらく話しこんだ。

二十分も三十分もセルアは待たされる羽目になった。

最初は知り合いに会ったんだから仕方ないと思っていたのだが、もうまるで自分がいないかのようにいつまでも話し込んでいる姿を見ると次第に怒りがふつふつと湧いてきた。

そして、ついに彼女のなかで何かが切れた。

彼女は彼と話す女性を押しつけ、彼の前に立つと強烈なパンチをその顔にお見舞いした。

驚いた表情を浮かべるラグーシをセルアは、きつと睨みつけると無言で店を出た。

外に出ると暗い夜道を歩き続けた。

黒く塗りつぶされた空のキャンパスにダイヤモンドの如くキラキラと輝きを放つ星達が散りばめられ、丸く大きく美しい月が浮かび、淡い光で地上を照らしていたが、そんな風景に魅入る余裕もなかった。

今だに怒りが消えない。

背後から足音が聞こえた。

「待つて待つて、ちょっと待ちなよ」

追いかけて来たらしいラシーグが彼女の腕を掴んだ。

「何の用ですか」

セルアは拗ねたような様子で聞き返す。

「さつきは悪かったよ。だから、戻ろう?」

「嫌です……」

「じゃあ、お詫びに明日も出かけよう。だから、戻ろう?」

「何でそうなるんですか?」

「いい所に案内してあげるし、何か食べるのも俺のおごりだから、ね?」

「そ、それなら……」

セルアは少しだけ安心した。

多分、本当なら今日食事をしたらその後はもう会うことはないだろうと思った。

けど、これは明日もう一度会えるということである。

明日会ったら、今度は……もう会えないのかもしれないが……。そんな風に後ろ向きなことばかりを考えていた。それからセルアは、おどおどした様子で尋ねた。

「そ、その……さつきは、すみません。殴ったりしてしまっ……」
「いや、大丈夫だよ。でも、こんなに強烈なパンチは始めて喰らったよ。平手打ちなら日常的だけだね」

苦笑いしながら言うラシーグに対して、セルアはむっとした表情になった。

日常的に女に引つ叩かれるようなことをしていると云うことだ。彼は、すぐに笑顔を浮かべて質問を投げかける。

「俺が一目惚れした時ってどんな時だと思っ？」

「あんたが一目惚れですか……」

正直、ラシーグが一目惚れしそうなシチュエーションは思い浮かばなかった。

セルアは、うんうん唸りながらピアノを弾く女だとか、絶世の美女が川辺で物憂げな表情をしているところなんかを想像してみたが、どれもラシーグが一目惚れしそうではないと何となく分かった。

そんなセルアの様子を横目に、面白そうに正解を口にした。

「強烈なパンチを喰らった時だよ」

「ボクシングの女の人が好きなんですか？」

「あのね、俺はもう少し守りがいのある子を選ぶよ」

「じゃ、格闘技の子ですか？」

「俺の話聞いてた？」

「ボクシングのマッチョな女の子とでも結婚してればいいんですよ！ 軍人の嫁なら敵を張り倒せるぐらい強い方が安全ですよ！」

知らない間に怒り出していた。

これは、なぜか分からなかった。

よく聞く嫉妬心というやつだろうか。

「いくら安全でも好きな子と結婚しなきゃ意味ないだろ？」

「そ、それは——」

セルアが何か言いかけたが、ラシーグがその口を自分の口で塞いでその先の言葉は出てこなかった。
目をぱちくりさせながらセルアは、頭にハテナマークを浮かべていた。

何が起きているのか分からない。

ラシーグは、そのまま彼女の身体を抱き寄せる。

その先に進もうとした瞬間、強烈なパンチが彼の顔にお見舞いされた。

走り去って行くセルアの姿を見ながら、彼は苦笑いを浮かべる。

「別に俺は、殴られたりするのが好きじゃないんだけど——
急ぎ過ぎたかな」

ラシーグがセルアを知ったのは最近ではなかった。

伯爵令嬢ということで前から知っていて、彼女を見ていつも何か思うところがあった。

ああ、これは恋だったんだな。

ようやく気づいたが、ラシーグは焦っていた。

戦地に行くまでもう時間があまりない。

早く、幸せを掴まないとね。死んでも悔いがないように。

夜風は肌寒かった。

約束通り、翌日出かけてからセルアとラグーシはたびたび会った。

先日の夜の出来事は出来うる限り考えないようにした。

きっと、他の女の子にも同じようなことをしてるんでしょう。

正直、いい気はしないが自分はラグーシの恋人でも妻でもない。
あれこれ言う資格はないだろうとセルアはあの時のことについて
は一切話を持ち出さないことにしていた。

ラグーシの様子は、いつも変わらず明るく太陽のような笑顔で面白い話をセルアに聞かせたりいろんな店に連れ出したりしていた。

ある日、セルアはラグーシに連れられて海に来た。

目の前には、ブルーのはるか彼方まで続く海が、太陽の光を浴びてキラキラと輝いている。

セルアはむすつとした表情で呟いた。

「海なんか来ても何もないじゃないですか。泳げませんし」
「泳げなくても、この風景は素敵だと思わないかい？」

笑顔でラグーシは、何かを強調したいのか両手を広げてみせた。

「私は、ロマンチストじゃないから、よく分かりません」
「そうなんだ？ あ、何か面白い話ないかい？」
「面白い話ですか……」

セルアは自分の記憶を探ってみた。

人に話して聞かせられるような面白い話が自分の周りにあっただろうかと思いつつ、ポンと両手を叩いた。

「面白い話じゃなくて、おめでたい話なんですけど……」
「うん？ 話してみて」
「私の友達が結婚したんです」
「それは、確かにおめでたい話だ」

にっこりと笑うラシーグに対してセルアは難しい表情を浮かべる。

「でも、早いと思うんです。その子は私と同じでまだ十六歳なんですよ」

「そうでもないだろうね、今は。戦争が始まってるから、男はいつ行かされるか分からないし、戦争が終わるまで生きてるかも分からない」

一旦言葉を区切り、

「だから、今のうちに好きな人と結ばれておきたいんじゃないかな？」

「そ、そうなんですか……」

戦争という言葉聞いて、セルアは胸が痛む気がした。

戦争がひどくなったら、ラシーグも行ってしまうんですね？

軍人ですから、ひどくならなくても行くんでしょうか？

「俺も、やりたいことは早くやっておくべきだと思うよ。だからさ」

ラシーグは、再び太陽のように明るい笑顔を浮かべ、セルアを見た。

「俺達、結婚しないか？」

「え？」

思いも寄らなかった言葉にセルアは目をぱくりさせた。

今、ラシーグの口から発せられた言葉をよく考える。

理解した瞬間、顔が真っ赤になりゆでだこのように熱くなった。

戸惑いがちに言葉を発する。

「で、でも、まだ私は十六歳で……」

「大丈夫だよ。今じゃ珍しくないし、結婚は十六歳からできるしね」
「でも、ラシーグは」

「俺は十八だよ？ 言わなかった？」

セルアは首を左右に振った。

何とか逃れる術を探してみた。

「いきなり結婚なんて、お父さんが何て言うか……」

「反対されたら、その時は駆け落ちでも何でもいい」

「そ、その……」

セルアは、恐る恐る一番気になっていたことを口にした。

「もし、結婚したらもう他の女の子とデートしたりしませんか……？」

今まで、いろんな女とデートするラグーシの姿を見かけていたセルアは、そこが不安だった。

ラグーシはにっこりと笑う。

「しないよ。約束する」

「うっ……」

いよいよ逃れる術がなくなった。

「ね？ もう一度言うよ。結婚しよう」

「は……はい……」

セルアは、顔を真っ赤に染めたまま戸惑いながら頷いた。

ラシーグは、そっとセルアを抱き寄せ、唇を重ねた。

セルアは、頭が真っ白だった。

「戦争が終わったら、結婚式を挙げよう。そうだな……俺は小さな教会で二人だけがいいかな？ 生憎、呼ぶ人もいないもんでね」

苦笑いしながら言う彼に対して、セルアは黙って頷いた。

セルアも派手なのは恥ずかしいと思っていた。

「子供は五人くらいほしいかな。男の子と女の子両方ほしいな」

「い、いきなり何言ってるんですか……。私に五人も産めと……？」

「俺に他の女と子供作って来いって言いたいのかい？」

「……頑張ってみます」

そうして結婚を決意したが、案の定、セルアの父は大反対した。原因は、それを知った父がラシーグのことを徹底的に調べた結果の女性関係だった。

浮気はしないと宣言したとは言え、簡単には信じてもらえない。

セルアが父親に反対されたことを話すと、ラシーグは焦った様子も全くみせずに笑顔で言った。

「じゃあ、駆け落ちだ」

「か、駆け落ちですか……。そんなこと、できるんですか？ ほら、お金とか生活していくのに……」

「あのね、相手を養っていけるぐらいじゃないと、結婚なんてできないからね？ 俺は軍人だし、ちゃんと給料ももらってるんだから、住む所もちゃんとあるし——何とかなるさ」

「何とかって」

そんないい加減な……。

それでも、彼が言うのなら本当なのだろう。

ラシーグは嘘をついたことは一度もない。

他の女とデートをしたのかとセルアが尋ねた時も素直に認めていた。

ラシーグに連れられて辿り着いたのは、小さな一軒家だった。

周囲にはポツポツと木々があり、すぐ近くには湖が見える。

明るい太陽の光を浴びた湖は、底に宝石でも沈んでいるのではないかと思うほど煌いていた。

そんな光景をぼーっと見ていると、腕を引かれて家に入る。

家のなかに入ると、リビングまで案内された。

二人が使う分には十分に広く、白いテーブルや青いソファが置かれており、壁には大きな窓がある他、絵なんかがかけられている。

全体的な色合いや家具の種類などは男性趣味なものが多く、セルアはもう少し可愛い家具があってもいいと思う。

ソファに腰掛けるとふわふわした感触が心地良い。

「何か飲む？」

「いいです」

「そっか」

いざこうなると何を話せばいいのかわからない。

こうならずとも、普段から話し出すのはラシーグの方でセルアから話を持ち出したことなど滅多にない。

会話もないまま、ラシーグが窓を開け放つ。

窓から流れ込んできた風にセルアは思わず身震いした。

「寒い？」

「寒くないです」

寒いほどのものでもなかった。

まだ日が高い時間帯で空気も暖かい。

「寒くなくても、身震いする時ってあるじゃないですか」

「確かにそうだね」

笑って答えるラシーグに対して、セルアはその後、話を続けることができなかった。

何か話さなければと思いつつも緊張して言葉が出ない。

ほんの数ヶ月前までは、男の知り合いもいなかったせいでいつか結婚するのもかもしれない程度に考えていたから、突然の出来事について行けないというのが現状である。

だが、ラシーグは意外にも物知りでいろんなことができて明るく行動力があっていつもセルアをリードしてくれる。

「今は戦争中だから、状況が悪いと帰れない日もあるかもしれないけど許してくれるかい？」

「はい、大丈夫です」

セルアはこくりと頷いたが、内心はそうではなかった。

できることならば、軍人なんかやめてもっと安全な仕事をしてほしい。そうなれば、戦争で死んでしまうのではないかという心配も少なくなる。軍人ではなく、一般人なら戦争に行かなければならない確率は低い。

しかし——今までラシーグの話を聞いてきて、彼が軍の仕事が好きだということも知っている。

だから止めることもできない。

「わ、私はご飯作ったりとか……洗濯したりとかします」

「できるの？」

ラシーグが疑問に思うのも当然だろう。

セルアは、一応貴族令嬢だ。

普通の娘とは違い、母親の家事を手伝ったりすることもない。だからと言って、使用人の仕事を手伝うというのもあり得ない。だから、その手のことは何もできないとラシーグは踏んでいた。

「できます、多分……」

「多分ね。期待しておこうか」

「期待はしないでください。でも、何だか結婚した感じはあまりしません。やっぱり——」

言いかけた時、セルアの口をラシーグが自らの口で塞いだ。その直後、彼は告げる。

「俺は、英雄になるんだ」

「英雄？」

「国を守る英雄にね。そしたら君に見合う人間になれるかな？」

「そ、そんなの……むしろ私の方があなたに見合ってるのか……」

「君はバカだなあ」

「なっ……」

セルアが顔面に拳を叩き込む用意をしているのをよそに彼は、明るい笑顔で告げる。

「セルアは魅力的だよ」

「な、な……あ、その、お昼ご飯作って来ます！」

真っ赤になった顔を隠しながらセルアは立ち上がると、慌てて台所へ向った。

こんなんじゃ、保ちそうにないです……。

心臓が高鳴るのを止めようと胸を押さえつつ、覚束ない動作でフライパンを握った。

この先どうなっていくのか全く予測はつかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1724ba/>

英雄の花嫁

2012年1月4日12時36分発行